

# 伊賀隠史サイエンス舎 夏見雅楽会

名張川右岸の丘陵斜面にある夏見廃寺は、出土遺物により7世紀末から8世紀前半に建立されたと推定されています。その廃寺跡より出土した博仏に描かれている楽器の復元演奏を目標として、平成23(2011)年に「伊賀隠史サイエンス舎」を母体とした「夏見雅楽会」が発足。月に一度、雅楽の練習を重ね、演奏会を開いています。



雅楽用の譜本

お問い合わせ

「伊賀隠史サイエンス舎  
夏見雅楽会」  
TEL 090-3383-0966

「伊賀隠史サイエンス舎 夏見雅楽会」は、名張市民センターのサークル活動の一つとして、笙、箏、龍笛を練習しています。演奏を楽しむだけでなく、日本古来の文化や精神に触れることのできる雅楽器。その魅力について世話人の富田 廣さん、メンバーの肥後 和代さん、尾上 佐登美さんにお話を伺いました。

— それぞれの雅楽器の特徴と、はじめたきっかけを教えてください。

尾上：龍笛は7つの指穴がある横笛で2オクターブの音域を持っています。唄口も指穴も大きく、指全体でしっかり押さえて吹かないと思った通りの音が

出せず、そこが難しいのですが、うまく吹けると遠くまでよく通るししっかりした高音で、その美しい音色にはまりました。名前が示すように天と地の間を行き交う「龍の鳴き声」を表しているときられています。曲の立ち上がりや左右し、全体をまとめる役割もあるため、技量が身につくよう練習あるのみです。

肥後：笙は吹口に息を入れると、竹に付いているリードが振動して音となります。吹いても吸っても音が出るのが特徴で、高さの異なる音を一度に鳴らすことができます。指孔を5〜6つ同時に押さえて、「合竹」という奏法で音を響かせますが、吹き方によって1オクターブ変わります。音色は「天から差し込む

光」を表すとされ世の中にこんなきれいな音があるのかと習い始めました。笙は吹く前後に温める必要があったり、箏のリードはお茶などの熱い液体につけて、開かせるといいう手順が必要だったり、雅楽器は扱い方にも特徴があります。富田：箏は竹の筒に蘆を削って作ったリードを差し込み、そのリードから息を吹き入れて音を出す縦笛です。主に主旋律を担当する楽器で音域は狭く、「人の声」つまり「地上の音」を表すとされています。これらの雅楽器を合奏することが、基本の表現となります。

— 独特な音色が重なり合うことで魅力が増すんですね。

富田：雅楽は日本独自の音楽であり、

「越天楽」や「陪臚」など、神社仏閣や結婚式場などで耳にする機会もあるでしょう。肥後：指揮者がいませんので、その時々で音はナマモノです。周りと速さがずれてしまわないように、お互いに気を付けています。

尾上：公民館での発表会のほか、宇流富志禰神社のお祭りなどで披露することもあります。それに仲間たちと斑鳩法隆寺などの演奏会に出掛けたりしています。

— 活動の母体は「伊賀隠史サイエンス舎」と聞きました。

富田：平成18(2006)年4月に設立された組織で、国指定史跡夏見廃寺の研究を軸に、具体的には7世紀初頭〜8世紀にかけて「名壱横河」といわれた畿内東限が、飛鳥・藤原京の強固な防塞であったことや神仏の国家鎮護の拠点であったことの解明をしてきました。紀行作家の玉城 妙子先生を講師に、現場に出てフィールドワークも重ね、また吉野を出発して名張までを10回ほどに分けて歩き、臚げながら当時のことがわかってきました。

夏見廃寺展示館に金堂を飾ったとき

れる博仏があり、そこに楽器を弾く人、獅子などが表されています。「夏見雅楽会」は、それがどんな楽器か、材質は何かと疑問をもち、楽器を復元して演奏したいという想いで、天理大学雅楽部の総監督・佐藤 浩司さんを講師に迎えて立ち上げました。竹が何本か集まった楽器の復元に、お子さんも交えてワークショップをしたこともあります。

— 地元名張で、壬申の乱ゆかりの地の探索の成果をまちづくりの活かし、雅楽で日本の伝統音楽と地域の歴史を広めています。

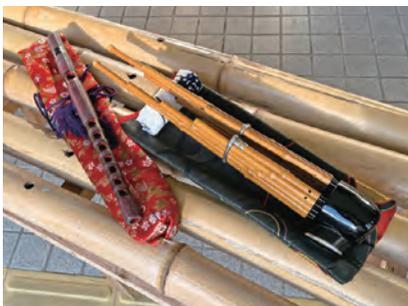
インタビュー：中村 元美



世話人 富田 廣さん(右)  
肥後 和代さん(左)、尾上 佐登美さん(中)



雅な音を響かせる



龍笛(左)と笙



斑鳩雅楽会と共演した演奏会\*

\*印の写真は取材先から提供していただきました